

毎日の授業や生徒との接し方に悩む若い先生たち、こんな小さなきっかけから生徒が変わります。

三学期の取り組み

三学期には二つの仕事があります。一つは、年度最終の学習をどのような単元に組織して締めくくするかを考えること、もう一つは、次年度のカリキュラムを作ることです。

1 どのような「授業おさめ」にするか

一学期末、学習者一人ひとりがどのように成長しているか（つまりずっと停滯しているところはないか、それはどういう点かも含め）を確認しました。その時、個々の成長に、育てようとしたこと以上の、あるいはそれ以外の力がついていることを発見したと思います。

授業は育てたい力を考えて組織しますから、育っているかどうかを評価するのは当然ですが、学習の内容（特に、話し合いや討議の学習で取り上げたテーマや読書を取り入れた単元）によっては、予想を超える力が育っていること、特に考える力がついていることが多々あることに気づくものです。ここをとらえ、学習者一人ひとりに声をかけ、ほめ、励ましていくことが大切です。それが、学習者の意欲につながるからです。そのうえで、最終単元を組織したいものです。いつも欠落部分を補うような目標ではなく、少し背伸びして向き合える学習が必要で。

この時期は、文章にまとめたり、発表会や討論会をもったりと、いろいろ計画されているでしょう。それにぶつけることも一つの方法ですが、国語科として一年間

の有無、父母の学校に対する関心と協力などです。

具体化について述べましょう。

☆まず、教科書を分析する。

○「読む」中心の単元——年間七（三年は六）

○読書、読書生活に関する学習——年間一

○「書く」プロパールの単元——年間三（三年は四）

○「話す」「聞く」「伝え合う」

・一年—スピーチ、発表、グループ・ディスカッション

・二年—目的に応じて聞く、プレゼンテーション、インタビュー

・三年—わかりやすく話す、語り合う、パネル・ディスカッション

☆初心者は教科書どおりに。

カリキュラムは教科書どおりでよいのです。目標と教材が明示され、学習活動（評価を含む）が示されていますから、初心者（教職について三年ぐらいまで）は徹底してなぞるように教えていけばよいのです。そのように経験することによって、「カリキュラム作り」を身につけてほしいと思います。

☆十年選手は自分で作る・仲間と作る・後輩に教える。

教科書は完成品です。単元の数や配列は、教材探しや教材選びとともに、多くの時間をかけて議論を重ねてきました。ですから完成度の高い商品でもあります。真似してよいわけです。しかし、学校現場では、学校行事があります。テストと称する評価があります。「総合的な

のまとめをし、新たなスタートに備える——」始まりを意識した、よい終わり（節目）にふさわしい内容の単元にするのを第一に考えたいものです。例えば、次のようなものはどうでしょうか。

○「日本のころ・日本らしさ・日本文化を探る」

（一・二年）からだ言葉で哲学する。色を表す言葉で哲学する。消えていく日本語・敬語表現を考えるなどの語彙と表現を結びつけた学習。

○外国人のための日本語表現辞典を作る。（一・二年）

○「文学にひたろう」（二年）

○「問題な日本語、何が問題!」（一・三年）

○「もう一歩先の古典学習のほうへ」（三年）

○「次の幕開きのために——わたしの人生にタイトルをつけるとしたら、わたしは（こんな）」（三年）

2 次年度のカリキュラム作り

年間カリキュラムは、学習者の実態と、学習者を取り巻く環境、学校の教育方針から具体化していきます。

学習者の実態とは、どのような子どもに育っているか、言葉の力がどのようについているかです。

環境とは、学校の規模（大きさ、生徒数、教員の個性や経験年数と人的配置、校舎、図書館・視聴覚教室・パソコンなどの設備の程度）、地域の地理的・歴史的条件、学習材にする資料整備の状況などを指します。

学校の教育方針とは、教育目標、重点目標、研究テーマ

学習の時間」の持ち方、選択学習のし方に学校独自の目標や方法があります。

そのことを頭に置いて、学習者に応じて、学校の規模や地域性、学校を作り上げているさまざまな文化や人間関係、教師の個性に応じてカリキュラムを作ります。要領を掲げておきます。

（一）「読む」学習は、三つの学期に三、三、一の割合で配分する。

（二）「書く」プロパールの学習を学期に一つ。ただし、「書く」は「読む」との関連で考える（情報収集との関連から）。

（三）「話す」を「書く」との関連で置いてみる（話す内容と書く内容を同じにする）。

・「話す」を「読む」との関連で置いてみる（読むで調べたこと）。

・スピーチ、発表、プレゼンテーションは、「聞く」学習と併せて行うことを考える。

・グループ・ディスカッションでは、すべての学習者が司会と記録を体験できるように時間を予定する（四十人学級でも、四人のグループ・ディスカッションにすれば、五時間で一巡できる）。

・インタビューの学習は、実際には「総合的な学習の時間」にも行えるよう、「総合的な学習の時間」のカリキュラム作りとタイアップさせる。

（元岐阜大学教授）

